
ふしぎ星のふたご姫 優しき魔王とふたご姫

Minosawa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふしぎ星のふたご姫 優しき魔王とふたご姫

【Nコード】

N7078P

【作者名】

M i n o s a w a

【あらすじ】

魔王ミノルは次元ワープで東京に向かったが、

彼が起きた場所は見慣れない場所だった。

何とそこは地球からはるか離れた星、ふしぎ星という惑星に流れ着いたのだ!!

実はそこでおひさまの国の双子のプリンセス、ファイン・レインに

出会った。

その出会いがふしぎ星の未来が関わる事だと知らずに・・・

第1話 始まりのワープ(前書き)

最新作、始動!

第1話 始まりのワープ

そこは、地球であるが、いつも空は闇のように暗く、くっきりと美しい満月が輝いている。

その隣には大きな城がある、そうそこは…

魔界である。

〔魔界城内〕

城内にある王座の間には、何百もの魔界の人が横に並んでいた。すると…

「皆の者、こちらに目を向けえい!!!」

王座の間の大きな椅子の前にいた大臣らしき白髪の老人が大きい声で王座の間にいる人たちの視線を向けさせた。

『タク、タク、タク』

王座の間に響く足音、そして…

「魔王様！やめてください、服を投げるのは」

「へいへい。んで、明日は何するんだ？」

「はい、明日からはスケジュールに空きがあり、休みでございます」

「よっしゃー！」

そう言うとミノルはすぐに服を着て走り出した。

「魔王様！護衛の者を…」

「いーらない」

ミノルは全力疾走で城内を走った。

大臣も走ったが、老体のせいかすぐにバテた。

「ゼエ〜ゼエ〜ゼエ〜、ま…魔王…さま…」

〜城外・ワープホール〜

ここは魔界から人間界の世界全てに行ける事ができるワープマシンがある部屋で、広さはミノルの部屋並みに広い。

「邪魔するよ〜」

「「あつー！魔王さま〜」」

ミノルがワープ室に入ると、白衣を着た女の子二人がいた。

「魔王さま〜この時間に何ですかあ〜？」

茶髪で眼鏡をかけたのん気で天然な性格の少女がミノルに尋ね、そして…

ギユユウ

「あらら？」

少女はミノルに抱きついた。

「こら！マルテ！」

もう一人の少女がミノルに抱きついた少女マルテを離す。

「何よラル姉！どうせあんたも魔王さまに抱きつきたいくせに〜」

「なっ！！何言ってるのよ…」

「まあまあ、お二人さん」

ミノルが二人を止めた。

「あっ！魔王さま…」

「ん？どうしたラルテ？」

ミノルが振り向くとラルテは顔を赤くして、顔を俯いた。

「な〜にラル姉？『私を今夜抱いてください』何て言うんでしょう？」

「ち、違っわよ！大体あんただって寝言で『魔王さま〜そこは…ダメエです〜』って寝言で言ってるくせに」

口喧嘩でギャーギャーする二人、そこでミノルは…

「はあ〜二人とも、早くワープさせたいんだけど…」

ミノルがそう言うと二人は、はっとなった。

「「っ、ごめんなさい…」」

ミノルはワープする魔法陣の中心に立っている。

「魔王さま、いいですかあ？」

「おお！頼む」

「それでは…次元法陣展開14879番連結」

「次元空間展開、目標は…」

「東京で頼む」

「了解！！目標、東京！次元ワープ作動」

ミノルの周りに稲光が走っている。

「ワープします！秒読み入ります5 / 4 / 3 / 2 / 1 / 0！！」

「！！！！！！！！！！」

ピピュン

ミノルはワープし、消えた。

「行っちゃったね」

「そうね…ん、これって！」

ピュン

「ん、着いたか東京に…」

ミノルが後ろを向いたら、大きい城があった。

「ま、まさか…」

ミノルは確信した。

「ここ東京じゃねーーーーー」

はたしてミノルはどこに飛ばされたのか？

第1話 始まりのワープ（後書き）

次回、ミノルは見たこともない世界に飛ばされた。

そこで、彼と出会ったのはふたごのプリンセスだった！

第2話 出会い(前書き)

ふたご姫登場！

第2話 出会い

前回までのおさらい

魔王ミノルは魔界から東京に向かってワープしたが、彼が着いた先は東京ではなく、見慣れない場所だった…

ミノルはひとまず城に向かって歩いた。

「何だ？ここは一体どこだ…ん？」

ミノルが見たもの、それは…

「ネコが…二足歩行!？」

彼が見たものは、猫らしい獣人が歩いていた。魔界では、悪魔、死神がいるが彼が獣人を見るのは初めてである。

「間違いなくここは東京いや、地球では…ないな。うむ…一体どうすれば…」

ミノルが考えて歩いていると一人？匹？のネコの獣人がミノルを見て驚いた。

「お、お前誰だ!？」

「うわ!やば!!!」

ミノルは全力疾走で逃げた。

ところが彼が逃げた先は、城の中だった。

「ゼエゼエ…何とかまいたが、城の中に入っちゃった〜どうしょ…」

ミノルは城の中を散策していると…

「ヤバ！誰か来る！」

ミノルは悟ったが、隠れる場所が無い。

「どうするどうするどうするどうする」あの〜「るって何でしょう?」
ミノルが後ろを向いたら、赤い髪色をしている若い女性に出会って
しまった。

「はっ!!!!!!!!!!」

ミノルはとてつもなく驚いた。すると…

「どうした?エルザ」

ミノルがもう一度後ろを向くと今度は、青い髪色をしている若い男
性がいた。

「(はあくこのフラグヤバくね、死亡系だな〜)」

ミノルは絶望を考えた。しかし…

「君は…どこの国の人だい?」

「へっ?」

ミノルの予想を180度狂わせた。

「えっ…と自分は…」

何故か目をそらしてしまふ。ここで「地球です!」何て言っても信
じてもらえない。そう思ったミノルだが、空気と場を考えたら、と
ミノルは考えた。

「ち…」

「「ち…?」」

「地球です!訳あって地球からあなた方のいる星に来てしまいまし
た!」

言ってしまった。

「(はあく言ってしまった…)」

「ち、地球?」

男性がそう言うと、ほほ〜という顔をしている。

「あの〜何か?」

ミノルが恐る恐る聞いてみると、男性は、

「君とちよつと話がしたい…来てくれないか?」

「はい?」

ミノルが連れてこられたのは国王、王妃が座る大広間だった。当然
ミノルもこの部屋に入って、すぐにわかった。だが何故彼が連れて
こられたのか？それは…

「君は…この本に載っている星の人間なのかい？」

国王トウルースが持っていた本それは、

『私が見た地球』

「ええ、地球は自分の生まれの星ですけど…」

「では教えてくれないか？地球について！」

「ええ…いいですよ」

ミノルは自分が知っている地球を教えた。歴史、経済、世界の違い、文化、動物の生態などを話した。

「……と私が知っているのはここまで……ですね
かれこれ四時間くらい話をしていたミノル。

「すばらしい。感動したよ！」

「ええ、ありがとうございます……」

「それで……あなたがどうしてこのふしぎ星に？」
エルザという王妃に質問されたミノル。

「それはですね……」

（説明中）

「そんな事が……」

「はい……何故です？」

「何故とは？」

ミノルはトゥルースに一番だと思った疑問をぶつけた。

「何故、私のような者を快く迎えたのですか？」

「それは……」

しばらく沈黙した……そして

「信じてもらえないと思うが、似ているんだ」

「似ている？」

「ええ……そつくり」

「……」

ミノルにはまったく覚えが無い。 そのエピソードはお楽しみ的で！

「あの……すみません……お願いがあります」

「お願い？何でしょう？」

ミノルは真剣な顔で二人を見た。

「今は宿無しの身ではありますが、このミノル何かできる事はありませんか!？」

「……できる事……」

ミノルの言葉に考える二人、

「では…」

トウルースが口を開いた。

「私たちには2人の娘がいます。その2人の護衛をやってもらいたいのです」

「護衛：ですか」

「正式には『お守り』ですけど…」

「はあ？」

ミノルは疑問に思った。それを言ったエルザ王妃の顔、少し困ったような顔だった。

「…では護衛の件、お任せください！」

「…お願いいたします」

「それじゃあ、キャメロット」

トウルースの言葉で一人の老婆が現れた。

「国王さま、何用ですか？」

「彼を、城内を案内してくれないか？」

「そうしたいのは山々ですが…」

よく見ればキヤメロットは慌てている様子だった。

「あの…どうかなされたんですか？」

ミノルが聞くと、

「ファイン様とレイン様がどこにもおりませぬ！」

「ファイン？、レイン？」

「私たちの娘です」

「ああ」

「そちらの方！」

「はい！」

キヤメロットの気迫のこもった言葉に少し驚くミノル。

「ファイン様、レイン様を探すのを手伝ってくださいませ！」

「はい！…しかし自分は2人の事まだ…」

「私たち2人の髪色をしている少女よ」

「なるほど」

エルザのアドバイスに納得のミノル。

「それではこのミノル、全力をもってお2人を搜索します！」

「うわ〜見てレイン！いろいろな国の気球が見えるよ！」

「うん！いろいろいるね〜」

2人の少女が雲の上でおひさまの国にやって来る他の国の気球を見ていた。

「へえ〜この国だけじゃないんだ〜」

「「?????」」

2人は後ろを見た。そこにはミノルがいた。

「あの〜どちら様」

「見ない顔だけど〜」

「あつ！申し遅れました…自分はお2人、プリンセスファイン・レインの護衛、お守りを勤める事になりましたミノルと申します。以後、お見知りおきを…」

ミノルが2人に深く挨拶した。

「こ、こちらこそ…」

「よ、よろしく…」

2人も挨拶した。

これが…魔王とふたご姫の出会いだった…

第2話 出会い(後書き)

作者

「どうも〜Minosawaです！」

ミノル

「ミノルです…」

作者

「今日はゲストをお招きしています」

ミノル

「ほう〜」

作者

「今日のゲストは、「おひさまの国」の、ふたこの半人前プリンセス、ファインとレインです」

ファイン

「半人前ってひどい！」

レイン

「作者さんひど〜い」

作者

「だって本当の事じゃん！」

ファイン・レイン

「「ひどい、ひどい(泣)」」

ミノル

「この馬鹿作者！ふざけた事ぬかしてんじゃねー！」

作者

「本当の事だからいいじゃん(笑)」

ミノル

「グウ〜」

エルザ・トゥルース

「「やめんか〜(怒)」」

作者

「ギヤアアアアアア」

ミノル

「自業自得だなまったく…にしてもとんだ親馬鹿…」

エルザ・トゥルース

「何か言った!?!」

ミノル

「いえ何も…」

次回 かつてふしぎ星を救った、プリンセスグレイス登場!!

ふたご姫がプロミネンスの力を手に入れる。

そして、ミノルに新たなる力が…

第3話 『使命と新たなる力』

お楽しみに〜

第3話 使命と新たなる力

前回までのあらすじ

ふしぎな星に流れ込んで来た魔王ミノルは理由あってその国のプリンセスの護衛兼お守りになった。そしてミノルはふたごのプリンセス、ファイン・レインに出会った。

ミノル

「あの…二人とも」

ファイン

「ん？」

レイン

「何ですか？」

ミノルは二人を呼び止め、二人は振り向いた。

ミノル

「何で…雲に乗ってるの？」

ファイン・レイン

「おもしろいから！」

ミノル

「ははは…って！危ないでしょ！二人共戻ってきてください」

ミノルが驚きながら二人に大声で怒鳴った。すると…

ファイン

「大丈夫…ってうわ！」

レイン

「ファイン…！」

ガシ！

ファインが滑って落ちそうになるもレインが辛うじてファインの手を握り、事なきを得た。が！

レイン

「きゃ！」

ファイン

「レイン…！」

ミノル

「…！」

今度はレインが落ちそうになった。しかし

ミノル

「っしょ」

ガシ

フライン・レイン

「「えっ!」」

ミノルが両手を使って二人の首根っこを掴んだ。

ミノル

「すごい!本当に雲の上に乗れた…二人とも!」

フライン・レイン

「「はっ!はい!」」

ミノル

「もう危険な無茶はやめてください!いいですね!」

フライン・レイン

「「はい…ごめんなさい…」」

ミノル

「わかればよろしい!…さてとカメラロットさんがお二人に用がある…」

カメラロット

「フライン様〜レイン様〜」

ミノル

「噂をすれば何とやら…」

ミノルは二人の首根っこを手から離した。そしてキヤメロットがやっってきた。

キヤメロット

「お二人、もうこんな事はしてはいけません！」

ファイン・レイン

「ごめんなさい」

二人はキヤメロットに謝った。
すると…

???

「プリンセスリオーネ様」

???

「お戻りください！プリンセスリオーネ様」

ふたご姫とミノルとキヤメロットは声のあるほうを向いた。そこにはある国の飛行船からまるで空飛ぶバイクらしきものが出てきた。

ファイン

「プリンセスリオーネ？」

レイン

「メラメラの国の飛行船から出てきたけど…」

ミノル

「いったい何が…？」

そう言っている間にもプリンセスリオーネ乗っている飛行物はおひさまの国の城の間に入っていった。

ミノル

「何か入っちゃいましたよ!?!」

ファイン

「どうする?」

レイン

「どうする?」

ファイン

「どうしよう?」

レイン

「どうしよう」

二人が交互に向き合いながら言い、そして・・・

ファイン・レイン

「行ってみよう!!」

そう言っつて二人は猛ダッシュした。

ファイン・レイン

「ちよつと行ってきまゝ」

二人はミノルとカメラロツト二人にそう言っつて向かった。

カメラロツト

「ファイン様・レイン様!!」

ミノル

「ちよつ!二人とも!!」

ファインとレインの後を追うミノル。

三人はエレベーターを使い、空中庭園に到着した。

ファイイン

「レイン！急いで！」

レイン

「わかってる！」

ミノル

「おそろくこっちかと……」

三人は辺りを見渡す。…とその時

三人

「『えっ！』」

突然何か大きな音がした。三人が音がしたほうを見ると…

????

「どいて〜」

空飛ぶバイクに乗った少女が三人がいる方に迫ってきた。

三人

「「「うわーーーーー」」」

三人は思いっきり逃げるように走った。

????

「お願い退いて!」

ファイン・レイン

「「そんな事言っただって〜」」

二人は叫ぶように答えた。

ミノル

「やむを得ん!」

そう言ってミノルは????の方を向いて止まった。

ファイン

「ミノル!」

レイン

「危ない!」

ミノル

「ふんぬ！」

ミノルが空飛ぶバイクを受け止めた。

が！しかし…

???

「キャ！」

ミノルが突然受け止めたせいかその反動で少女が前に飛んでしまった。

ミノル

「しまった!？」

ミノルは受け止めたバイクを置き、走った。

???

「へっ！」

ミノルがダイビングキャッチで間髪一髪少女を助けた。

ファイブ

「ミノル！」

レイン

「大丈夫！」

心配してやってきた二人、だがミノルは二人の方を向いた。

ミノル

「ははは…大丈夫です…」

ミノルが苦笑いで答えた。

リオーネ

「私メラメラの国のプリンセスリオーネ」
鮮やかなオレンジ色の髪色で、ネコの耳をしていた少女、リオーネがふたご姫とミノルに挨拶した。

ファイン・レイン

「おひさまの国の」

レイン

「プリンセスレインです」

ファイン

「プリンセスファインです」

二人は一回転した後リオーネに自己紹介した。ミノルが挨拶しようとするが、ミノルはリオーネがふたご姫を見て驚いた様子だった。

リオーネ

「じゃあ！あなた達がふしぎ星始まって以来、もっともプリンセスらしくないプリンセス…」

ファイン・レイン

「ズーーーーー……」

リオーネの言葉にかなり落ち込む二人。

ミノル

「ええ〜っと…それはどういう意味なのでしょうか…?」

リオーネの言葉に疑問を抱くミノル。

リオーネ

「えっと…あなたは?」

ミノル

「私は魔…じゃなくてこのプリンセスファイン・レインの執事兼護衛のミノルと申します」

リオーネ

「あなたが新しくもっともプリンセスらしくないプリンセスの執事兼護衛のかわいそうな人?」

ミノル

「あなたの言葉、暴言として受け取ります…」
リオーネの言葉にツッコミを入れるミノル。

リオーネ

「あの!私そんなつもりで言った訳じゃ!」

ミノル

「いえいえ…いいですよ…別に…」

ミノルは目線をそらして答え、慌てるリオーネ。

ミノル

「プリンセスパーティーに出場したくない？それはどうして？」

リオーネ

「うん…私人前に立つと上がってしまって、いつも失敗しちゃうの…だからプリンセスパーティーのダンス、きつと失敗しちゃう…」

「

落ち込みながらリオーネが答えた。だがファイインとレインは…

ファイイン・レイン

「「きやははは…わかる・わかる」」

リオーネ

「へっ？」

ふたご姫が笑っていたことに驚くリオーネ。

レイン

「私はドレスを着るのは楽しいけど、ダンスは苦手！」

ファイイン

「私は運動は得意だけど、ダンスは…」

そう言つて二人は並んだ。

ファイイン・レイイン

「「イヤイヤダンス!」」

そう言つて二人は踊り始めた。腰をクネクネしながら踊つた。

ファイイン・レイイン

「「イヤンイヤン! イヤイヤン!」」 くりかえし

二人のダンスに、苦笑いのリオーネとミノルであつた。

ファイイン

「でもパーティーに行けばおいしい物がいっぱいあるよ!」

レイイン

「素敵なドレスやアクセサリーがつけられるわ!」

二人の言葉にピクピクと耳を揺らしながら話を聞くリオーネ。

ファイイン・レイイン

「「いろんな国のプリンセスとお友達にもなれるしね!」」

ファイイン

「だから! ダンスなんて気にしない気にしない!」

レイイン

「楽しんじゃえばいいのよ!」

リオーネ

「ありがとう…少し気が晴れたわ」
笑顔で答えたリオーネ。

ミノル

「それはよかった!」

メラメラの国の配下1

「リオーネ様」

メラメラの国の配下2

「どこですか」

どこからか声がした。

リオーネ

「あつ!探しているわ…それじゃあまた後で…」

ファイイン・レイン

「うん!」

ミノル

「パーティーでまた…」

リオーネは声がした方向に向かって走った。

ファイイン

「よかったね!リオーネが元気になって!」

レイン

「うん!それじゃあ私たちもパーティーの支度しなきゃ!」

ミノル

「私も…会場の方へ…」

しかし…空が突然薄暗くなった。

レイン

「何？」

一同は驚きを隠せない。さらに…

ファイン

「あっ…光…」

ファインが指差した先には、庭園の中心部が光っていた。

ファイン

「うっ…」

怖いのか、ファインはミノルの後ろに隠れた。

レイン

「行ってみましょう…」

ミノル

「そうですね…」

ファイン

「ええっ！行くの!？」

ミノル

「大丈夫ですから…」

怖がるファインをなだめるミノル。

三人が光の前に立つと、エレベーターのような形で下から上がってやって来た。

レイン

「こんな所にエレベーターってあったっけ？」

ミノル

「さあ…聞いてませんね…」

だがミノルは少し懐かしく思った。

ミノル

『あれ・・・？このエレベーター…どこかで見たような…』

ファイン

「本当に乗るの？」

レイン

「乗りましょう！」

ミノル

「はい！」

ファイン

「ええ〜」

ファインの反対を押し切り、エレベーターへ乗り込む三人。そして…そのエレベーターは光の中へと消えたのだった。

そこは一面黄金に近い輝きの景色だった。

ミノル

『やっぱり…この風景…どこかで…』

そう心の中で思いながらもエレベーターは下に向かう。

そして…到着した。

ファイン

「うーん…ここは…」

レイン

「ぼかぼかする〜」

ミノルは地面に触れるとそこは緑色ではなく金色の芝生で、暖かい感触だった。

ミノル

「ここって…」

???

「ここは…おひさまの国の恵みの中心…」
すると前から突然人が現れた。

三人

「『人がある!?!』」

なんとか二人を落ち着かせたミノルであった。

グレイス

「私は…プリンセスグレイス」

ファイン・レイン

「プリンセスグレイス!!」

二人はその名を聞いて驚いた。ミノルは何のことかわからず…

ミノル

「って誰？」

ファイン・レイン

「ええ………!!」

ミノルの言葉に驚く二人。

ファイン

「知らないの！」

レイン

「嘘！」

ミノル

「すみません…」

レイン

「プリンセスグレイスは昔おひさまの国の輝きが消えそうになった時、全てをかけて救った伝説のプリンセス！」

ファイン

「キレイで！カッコよくって！私たちの憧れだよね！」

ミノル

「へえ」

二人の説明を聞いてわかった様子で答えるミノル。

ミノル

「質問！」

二人

「へっ？」

ミノルはいきなり挙手をして、二人は驚く。

ミノル

「それに…一人の男とかいなかった？」

グレイス

「!!!」

ミノルの質問に驚くグレイス。

レイン

「いいえ…彼女だけだと思っけど？」

ミノル

「そうですね…（何だ…何かどこかで同じ事を…）
心中何かを思い出そうとするミノルだが…」

ミノル

「いえ…いいです…忘れてください…」

ファイイン

「う…うん…」

レイン

「でも…大昔に死んだはずよ?」

ファイン

「や…やつぱり…オバケ?」

ファインは震えながら言った。

レイン

「オバケとしても肖像画のとおり…優しい感じだし…ちっとも怖くないよ?」

ファイン

「そう言われてみればそうかも…」

レインの言葉に納得するファイン。

グレイス

「ファイン・レイン、わざわざおひさまの国の中心に来てもらったことには訳があります」

ミノル

「訳?それは一体?」

グレイス

「実は…あなた達にやってもらいたいことがあるのです」
レイン

「やってもらいたい事?」

グレイスの言葉に疑問に思うレイン

グレイス

「今、このおひさまの国の輝きが、また再び衰え始めているのです」

ファイン・レイン・ミノル

「『えええー』……………」

あまりの言葉に驚く三人。

レイン

「輝きを失うとどうなるの？」

ファイン

「さあ？」

ミノル

「ふしぎ星に生息する全ての生命が死に絶える…という事か？」

グレイス

「はい…そのとおりです…」

ファイン・レイン

「『ええっ！』」

ミノルの言葉に驚く二人。

グレイス

「しかし…おひさまの国のプリンセスならば、星を救う事が出来るのです」

するとグレイスは両手を前に出し、その手のひらから光が集まってきた。

グレイス

「でも…今のあなた達では無理…あなた達に『試練』を与えなくては いけません」

ファイン・レイン

「『『試練』？』」

グレイス

「プロミネンスの力を使い、ふしぎ星に住んでいるたくさんの人々を助けるのです…それがあなたたちへの『試練』…つらい道のりになるかもしれませんが…ふしぎ星を救ってください」

すると…ファインとレインの手元に丸い物が落ちてきた。

グレイス

「『サニールーチエ』を受け取りなさい」

ファイン・レイン

「「うわーかわ…」」

ミノル

「えっ！お二人とも？」

突然二人が時が止まったように固まった。

グレイス

「ミノル…いえ…魔王ミノル…」

ミノル

「なっ!？」

ミノルは驚いた。無理もない…何故自分の正体を彼女が知っている。

ミノル

「何故…俺のこと…」

グレイス

「…やはり…覚えていないのですね…」

ミノル

「どういう事だ！」

グレイス

「あえて言います…あなたは二度、このふしぎ星に来ているのです」

ミノル

「な…！俺が…二度…このふしぎ星に来ている？」

あまりの事に驚くミノル。

グレイス

「これを…」

グレイスがミノルに渡したものは一枚の写真だった。それに映っていたのは、見たことのある人物が映っていた。

ミノル

「これは…エルザさんとトゥルースさん！？」

映っていたのはどこの学園の制服姿の13人の人が並んで映っていて若い頃の二人が映っていた。

そして…その隣に映っていたのは…

ミノル

「何で…俺が映ってたんだ！？」

隣に移っていたのはエルザとトゥルースと同じ制服を着ている自分の姿だった。

ミノル

「そうか…だからあのお二人はあんな事を…」

トウルース

『信じてもらえないと思うが、似ているんだ』

ミノル

『似ている？』

エルザ

『ええ…そっくり』

ミノル

「でも…俺は…プリンセスグレイス！教えてくれ！？」

グレイス

「いづれ…わかる 때가 来ます…そして…これをあなたに…」

グレイスがミノルに渡したものはおひさまの国の紋章が刻まれているペンダントと一本の刀、そして白銀の籠手だった。

ミノル

「これは？」

グレイス

「あなたの身を守るためのものです…これで…あの二人を…」

ミノル

「『守る』でしょ？いいでしょう！それで…」

そしてミノルは不思議な事を言った。

ミノル

「未来に輝く光のためなら…未来ある者のためなら…命を賭けよう」

グレイス

「…！」

グレイスから見たミノルの姿は執事服ではなく、白銀の鎧をしたミノルの姿が映っていた。

グレイス

「では…よろしくおねがいします…」

ふたご姫とミノルの意識が同時になくなった。

三人が気づいたときにはおひさまの恵みの中心ではなく、庭園だった。

ファイン

「何だったんだろっ?」

レイン

「さあ？」

ミノル

「大丈夫ですか！二人とも！」

心配したミノルがファインとレインに尋ねた。

ファイン

「夢？」

二人は手にはサニールーチェが、ミノルは腰元に刀と首にペンダント、右手には籠手があった。

三人

「『夢じゃない！』」

レイン

「プロミネンスの力って何？」

ファイン

「何に使うのかな？」

ミノル

「それにプーモって？」

????

「お呼びでプモ？」

三人

「『！』」

三人が声がしたほうを向くと、一つの箱があった。

???

「ボクにおまかせくださいでプモ」

すると箱が勝手に開き、そこには一匹の生き物がいた。

プーモ

「はじめまして、プーモともうしまプモ！この世に美しくこそうめいなプリンセスにお使いできるとは光栄に存知まプモ」

ミノル

「何？この小動物…」

ふたご姫と一人の執事がプーモと出会った瞬間だった。

第3話 使命と新たなる力（後書き）

長かったかな？

次回はパーティー開始！何と！ミノルが？

次回『Shall we ダンス？』お楽しみに！

第4話 S h a l l I w e ダンス!? (前書き)

M i n o s a w a

「今回はこのタイトルの意味がわかります」

ミノル

「ホント作者は…」

第4話 S h a l l w e ダンス!?

前回までのあらすじ

魔王であり今はおひさまの国の執事兼護衛になったミノルとおひさまの国の双子のプリンセス、ファインとレインが伝説のプリンセス、グレイスと出会った。グレイスにふしぎ星が危ないと告げられた三人。

ファインとレインとミノルはグレイスにプロミネンスという力をもらい、元の世界に来た一行が見たものは一匹の小さな生き物プーモだった。

ミノル

「何？この小動物？」

プーモを見てミノルが言った。

プーモ

「ボクは小動物じゃないでプーモ！ボクはプーモでプーモ！」

ミノル

「す…すみません…」

プーモが怒りながらミノルに言って、ミノルは何故か謝った。

ミノル

「いけない！自分はそろそろ…」

庭園の時計を見て驚くミノル。

ファイイン

「そっか…」

レイイン

「いってらっしゃい」

ミノルはすぐにエレベーターに乗って庭園を後にした。

レイイン

「それより…あなたがプーモ？」

ファイイン

「あなたが私達に色々教えてくれるの？」

プーモ

「はい！プロミネンスの使い方や試練の事は全てこのプ・・・」
ファイン・レイン

「お願い教えて！はやく教えて！早く！早く！」

プーモが言い切れる前に突然ファインとレインがプーモの体を握って揺らした。

プーモ

「フセアブファスイア…プリンセスが乱暴になってはいけないでプーモ！」

プーモが苦しみながらファインとレインに言った。

ファイン・レイン

「だって早く知りたいんだもん」

プーモ

「では…教えるでプモ…」

目をクルクルさせながらプーモが答えた。

二人

「うん…」

一方、ミノルは会場に到着したが、すでに準備が出来ていて、結果カメラロットに叱られてしまった。

ミノル

「はあくいきなり出鼻挫かれた…初めてのパーティーだから頑張ろうと思ったのに…」

ミノルは落ち込みながら廊下を歩いていた。

すると…

エルザ

「ミノル…ちょっと…」

ある部屋からエルザがミノルを呼んでいた。

ミノル

「エルザ様？なんだろう…」

疑問に思いながらミノルはエルザがいる部屋に向かった。

だが…それがミノルにとってある意味…忘れられないパーティーになるとは知らずに…

城下町

「今日のプリンセスパーティーで七つの国のプリンセスの中からベストプリンセスが選ばれるんだってよ…！」

「へえ〜それは楽しみだな〜」

「ファイン様かレイン様が選ばれるといいな〜」

「ねえ〜聞いた？ファイン様とレイン様に執事が就いて、しかも中々のイケメンだって…」

「しかも国王からの紹介があるって!」

「ホント!?早くお会いしたいわ〜」

パーティーの話題からミノルの話題で盛り上がっている城下町。

そして、楽器の演奏が始まり、国王トゥルースが前に立った。
トゥルース

「それではこれより、第一回プリンセスパーティーを開催します」
ついにパーティーが始まった。しかし…

キヤメロット

「ああ、始まってしまった…」

物陰に隠れて見ているキヤメロットはおどおどしていた。

キヤメロット

「レイン様！フライン様！お早く！」

そう二人がまだ来ていないのだ。

と…すると…

一同

「「「「「！！！！」」」」」

突然照明が暗くなった。そしてライトはトゥルースに当てられた。

トゥルース

「その前に…我がおひさまの国は…ダンスのお相手を一人…紹介いたします…」

入り口に入ってきたのは、フラインとレインではなく…一人の男が立っていた。

一同はその男を見た。

リオーネ

「えっ!?!」

リオーネがその男を見て、驚いた。何故ならその男は…

トゥルース

「紹介します！あの方がプリンセスファイン・プリンセスレインの執事を担当するミノルでございます。」

執事服ではなく銀色のタキシードを着たミノルが立っていた！

第4話 S h a l l w e ダンス!? (後書き)

ついに始まったプリンセスパーティー！ダンスの相手にミノルが抜擢された！？

一体何故？

果たしてふたご姫はパーティーに間に合うのか！？

そして…プロミネンスの力が！

次回 『プロミネンス』 栄光の踊り♪ 『お楽しみに！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7078p/>

ふしぎ星のふたご姫 優しき魔王とふたご姫

2011年10月7日22時28分発行